

修士論文概要自閉スペクトラム症児における質問の意図理解と返答の獲得
—高次条件性弁別による分析と介入—

越沼 ひより

1. 問題と目的

自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder : 以下, ASD) の特徴として、他者との相互反応の質的な障害が挙げられる。その背景として、「心の理論」の問題が指摘されている。その一方で、ASD 児は一定の年齢を迎えると心の理論課題を通過するという先行研究が得られている (Happe,1995)。別府・野村(2005)は、ASD 児は課題を通過しても、日常生活場面においては「奇妙さ」が残ると指摘している。その「奇妙さ」の要因として、他者の意図理解の困難さが挙げられる。意図理解とは、相手の状態や欲求から推測するものである。ASD 児が困難を示すのは、ASD 児が言語に注目しすぎてしまう為に、字義通りではない意図まで推測することが困難なのではないかと考えられる。

応用行動分析学の視点から見ると、松岡・小林(2000)が条件性弁別の枠組みで心の理論課題を整理している。また、奥田・井上(2000)は高次条件性弁別の枠組みから心の理論課題に対して新しい枠組みを提案している。心の理論の下位能力の1つである他者の意図理解についても、先行研究と同様な高次条件性弁別の枠組みで整理し、見本合わせ課題を用いる事で訓練可能であると推測した。

そこで、本研究では、高次条件性弁別の枠組みに基づき、見本合わせを用いたトレーニングによって、他者の質問の意図理解とそれに対応する返答の獲得が促進されるかを検討する事を目的とする。

2. 方法

(1) **倫理的配慮**：本研究において参加児とその保護者に対して、研究の内容や目的について指導開始前に確認し、同意を得た。

(2) **参加児**：大学付属の臨床心理センターに通う、自閉スペクトラム症のある高校1年男児(A児)と中学3年男児(B児)が参加した。(3) **機材および刺激**：アセスメントとトレーニングでノートPCを使用した。見本合わせ課題でホワイトボード4枚を使用した。他者からの質問についての刺激として、一般的な「確認」の意図の他に、回避、注目要求、要求の3つを設定した。1つの質問に対して、異なる2つの意図の状況を設定し、訓練刺激と般化刺激で6刺激ずつを作成した。

(4) **手続き：ベースラインおよびプローブ条件**：他者からの質問場面を訓練刺激で6試行、般化刺激6試行と分け、合わせて12試行を設定した。参加児に文章刺激で提示した後、「質問に対しての返答」、「どんな意図で質問したのか」を言語表出で求めた。言語表出に対して、正反応の定義に満たない場合には、より詳しい回答を求めた。**質問の意図弁別トレーニング**：トレーニングでは訓練刺激を用いて見本合わせ課題を実施した。見本合わせ課題では、見本刺激に状況と質問を提示し、比較刺激として4つの意図を選択肢として提示した。参加児に質問場面を提示した後、状況と質問を弁別して、適切な意図を選択するよう求めた。正反応の場合には、正解のフィードバックを行い、状況から順に確認を行った。誤反応の時には、実験者から状況から順に確認の質問をしてから再度選択を求めた。6試行を1ブロックとして、刺激はランダムな順に実施した。**質問の意図弁別+返答トレーニング**：参加児に質問場面を提示した後、状況と質問を弁別してもらい、適切な意図を選択するように求めた。次に、選択した意図に対して2つの返答から適切な刺激を選択す

るように求めた。正反応の場合には、正解のフィードバックを行い、状況から順に確認を行った。誤反応の時には、実験者から、状況から順に確認の質問をしてから再度選択を求めた。その他は質問の意図弁別トレーニングと同様であった。**動画プローブ条件**：訓練刺激と般化刺激の場面を被験児の視点になるよう撮影した動画を提示した。提示した後に「質問に対しての返答」、「どんな意図で質問したのか」を言語表出で求めた。**(5) 従属変数**：意図と返答における理解を評価するために、ブロック毎のそれぞれの正反応率を算出した。

3. 結果

A 児の結果を図1に示す。A 児はベースラインにおいて訓練刺激で一部正反応であったが、ほとんどの試行で誤反応であった。B 児はベースラインにおいて全ての試行で誤反応であった。質問の意図弁別トレーニングでは2名とも4ブロック程度で100%の正反応が見られた。質問の意図弁別+返答トレーニングでは2名とも6ブロック程度で100%の正反応が見られた。また般化刺激では、A 児は意図理解と返答が83.3%、B 児では意図理解と返答が67.7%という結果になった。さらにA 児のみ実施した動画プローブ条件では、訓練刺激、般化刺激で100%と意図理解、返答と共に適切に回答する事が出来ていた。

4. 考察

本研究では、高次条件性弁別の枠組みから分析を行い、それに基づく見本合わせ訓練によって他者からの質問の意図理解と、それに対応する返答を獲得できるかを検討する事を目的とした。その結果、参加児2名とも介入後において質問の意図理解と返答を獲得できる事が示唆された。また、般化刺激でも概ね適切に反応できており、般化が示された。

さらに、A 児では動画刺激に対しても適切に反応することができており、日常場面に近い刺激に対しても転移することが示された。

見本合わせ課題を用いて、適切な刺激に対

する注目を促進した結果、場面に応じた意図理解および返答が獲得できたと考察する。動画刺激対しての転移した理由として、動画刺激内に文章刺激と等価な刺激が存在し、それを適切に注目し弁別する事ができた為、動画刺激に対して転移したと考察する。

今後の検討としては、日常生活への般化の評価を実施する事を挙げる。日常生活や学校場面への般化については評価していない為、今後評価する必要がある。また、対象児として、言語理解に制限ある児童や、低年齢に対しても同じ手続きで実施する事ができるかについて検討点とする。

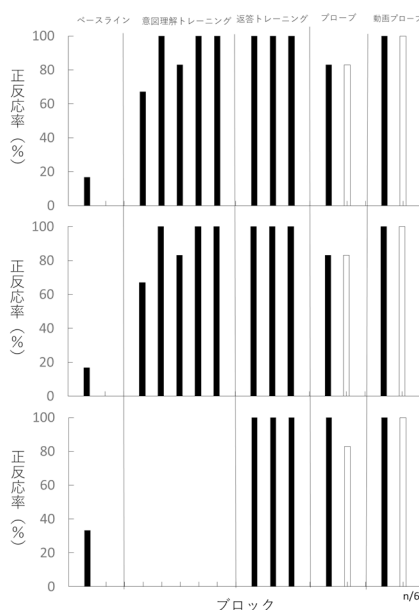


図1 A 児の試行全体 (上段)、意図のみ (中
断)、返答のみ (下段) 反応率の推移

5. 主要引用文献

別府哲・野村香代(2005). 発達心理学研究, 第16巻, 第3号, 257-264.
 Happe, F. (1995). Child Development, 66, 843-855
 松岡勝彦・小林重雄. (2000). 特殊教育学研究, 37(4), 1-12.
 奥田健次・井上雅彦(2000). 心理学評論, 32 (3), 427-442.